

第2章

中心市街地の現況と課題

2-1 現況と課題

2-2 現況と課題のまとめ

2-1 現況と課題

(1) 地勢

沼津市は、静岡県東部のほぼ中心、富士・箱根・伊豆の結節点に位置し、東駿河湾地域、伊豆半島への交通拠点、あるいは広域的な商業、文化拠点として、古くから県東部地域の政治、経済、文化の中心的役割を担ってきました。首都東京から100km圏内に位置する地理的優位性も有しています。

愛鷹山・達磨山山系の山々、63kmに及び変化に富んだ海岸線、まちの中心には狩野川が流れるなど自然環境にも恵まれ、千本松原や香貫山といった景勝地が中心市街地周辺に位置しています。

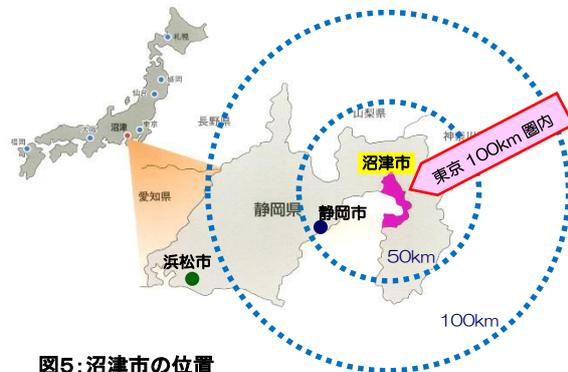


図5: 沼津市の位置

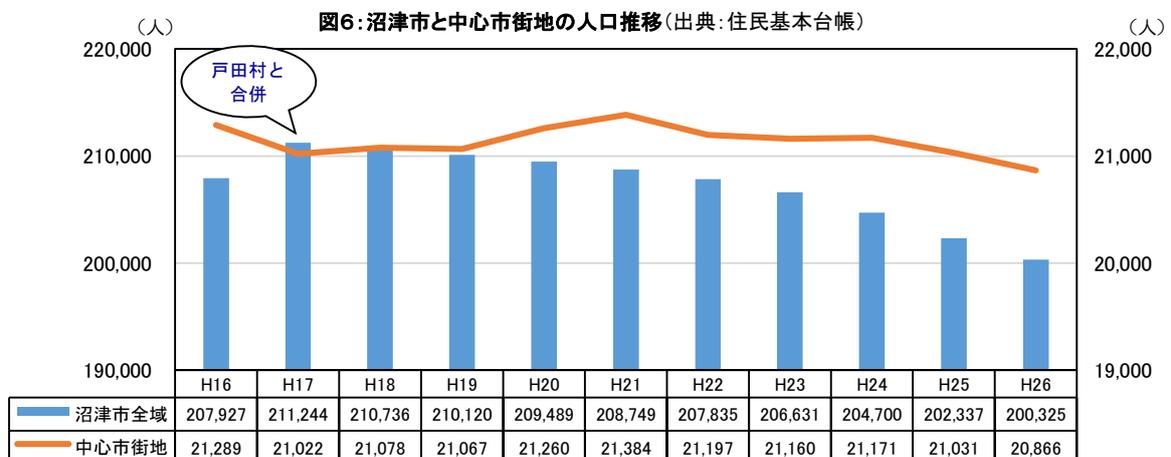
(2) 人口等

1) 人口

本市の人口は、平成6年をピークに減少に転じ、平成25年の転出超過数が全国6位となるなど、人口減少の地域活力への影響が懸念される状況にあります。

国立社会保障・人口問題研究所の将来人口予測では、平成52年に本市の人口は約14万5千人と現在の約7割に減少し、高齢化率は現在の約25%から約39%に、また、人口の再生産を中心的に担う20~39歳の女性の人口も現在の約6割にまで減少すると予測されています。

一方、中心市街地の人口は近年ほぼ横ばいであり、生活に便利な中心市街地に人口が回帰する傾向にあることがうかがえます。



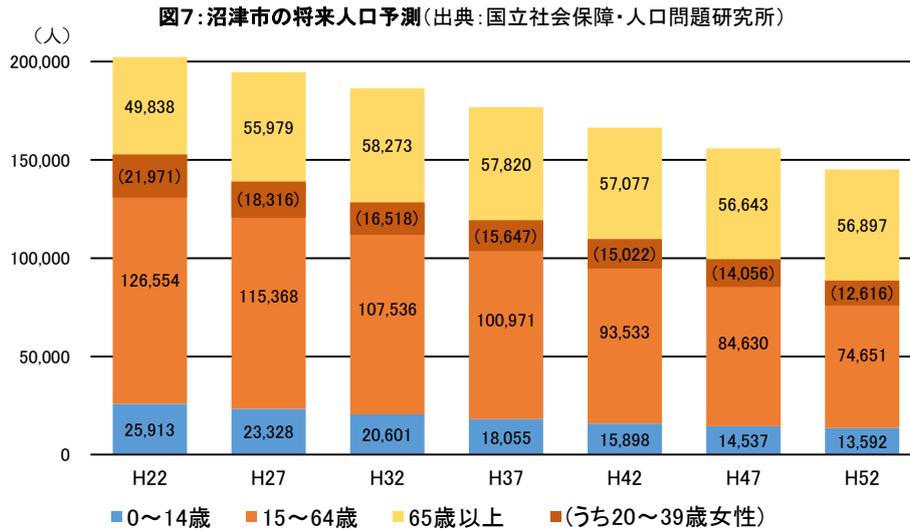
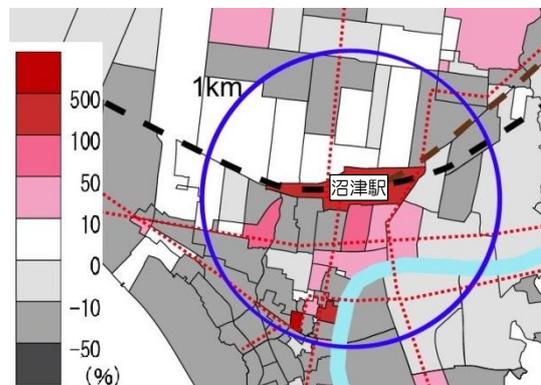


図8は中心市街地の人口推移をさらに町丁目別に分析したものです。駅南地区を中心に減少している地区が多いものの、集合住宅（マンション）の供給地では増加が見られ、中心市街地のマンションには一定の需要があることがうかがえます。

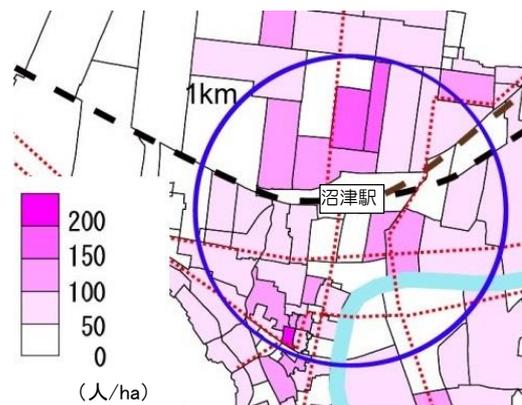
図8：中心市街地の人口増加率
(H16～26、出典：住民基本台帳)



2) 人口密度

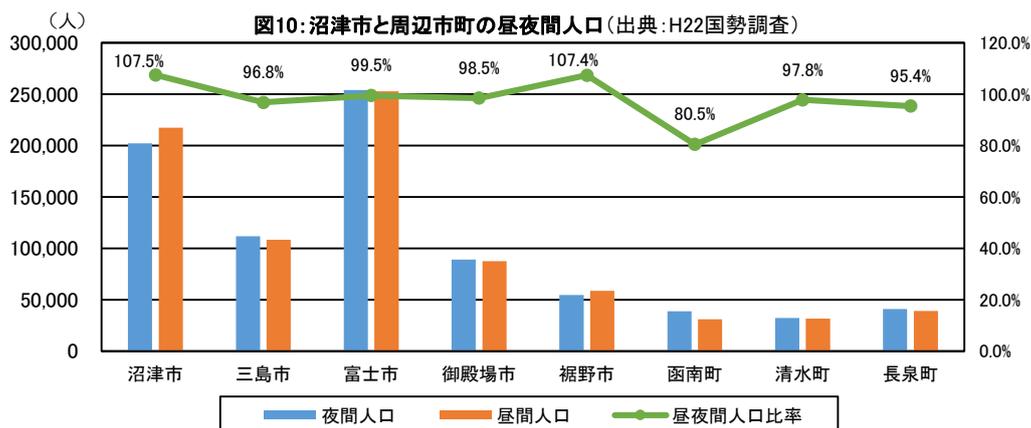
本市の中心市街地の人口密度は総じて高く、中でも幹線道路沿線や、商業・業務機能の集積地区の外縁部に人口が集中する傾向があることがわかります。

図9：中心市街地の人口密度
(H26、出典：住民基本台帳)



3) 昼夜間人口

本市の昼間人口は、夜間人口を約8%上回っており、県内でも高い水準にあります。隣接する市町では、昼間人口が100%に満たない地域が多いことから、本市が隣接市町の通勤・通学需要を吸引していることがうかがえます。



(3) 都市・交通基盤、土地利用等

1) 都市基盤

本市の中心市街地は、戦災復興土地区画整理事業などが実施されており、一定の都市基盤が整っています。近年も上土町・通横町地区第一種市街地再開発事業や都市計画道路納米里本田町線の整備など、都市基盤整備が進んでいます。

しかしながら、鉄道により南北の市街地が分断され、歩行者・自動車の往来に支障をきたしているほか、中心市街地の一体的な開発が阻害されています。こうした中、沼津駅周辺では、鉄道による南北市街地の分断の解消や土地利用の高度化を目的に、鉄道の高架化をはじめとする沼津駅周辺総合整備事業に取り組んでいます。平成20年には大手町地区第一種市街地再開発事業（イーラ de）が竣工し、駅南北で土地区画整理事業も進んでいます。

平成26年には総合コンベンション施設「プラサ ヴェルデ」がグランドオープンし、今後も町方町・通横町地区第一種市街地再開発事業や新市民体育館建設をはじめとする香陵公園周辺地区の整備が予定されるなど、中心市街地では、常に集中的な公共投資がなされています。

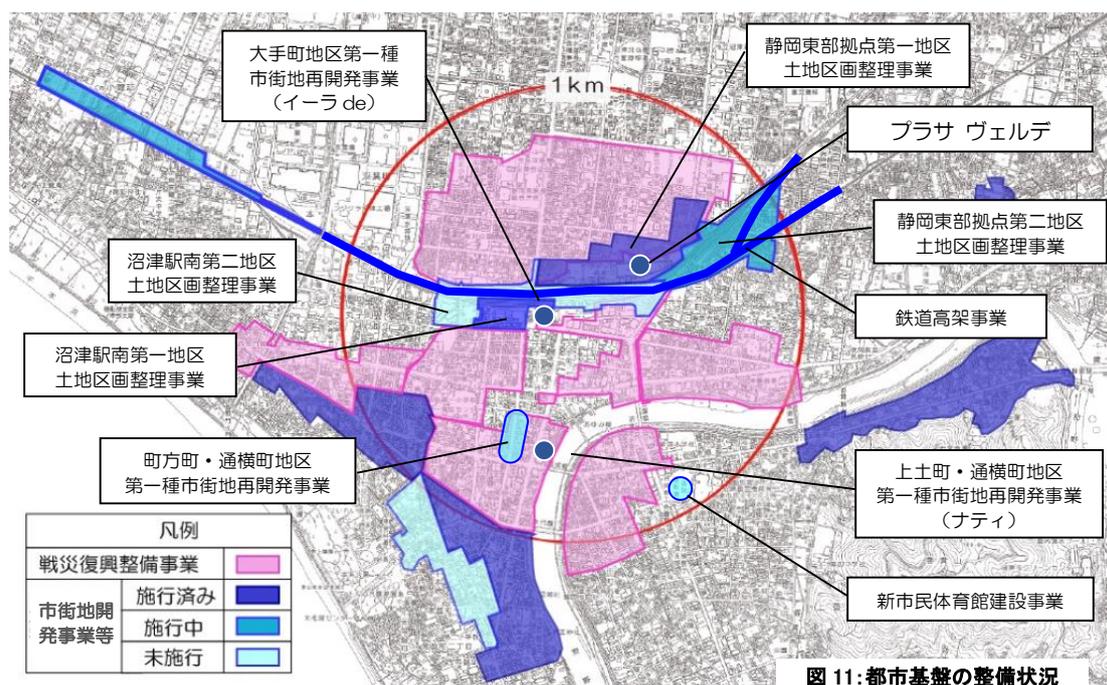


図 11: 都市基盤の整備状況

2) 都市基盤

本市の中心市街地及び都市的居住圏における主要な都市機能の集積状況は下図のとおりです。

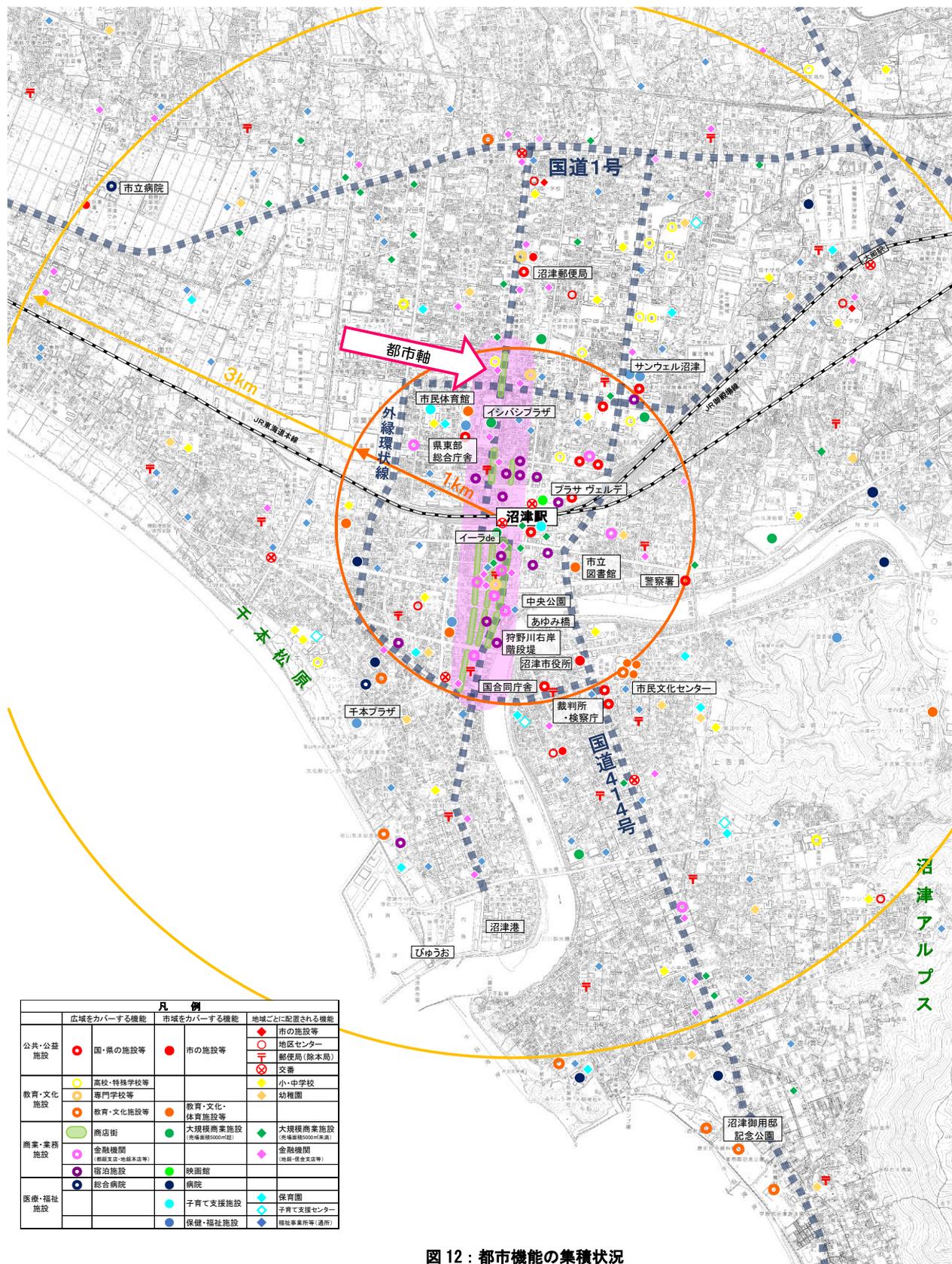


図 12：都市機能の集積状況

本市の場合、都市機能が集積した都市軸が沼津駅を中心として南北に伸びていることがわかります。国道414号沿道にも行政や教育文化を中心とした都市機能の散在が見られます。

また、中心市街地には、広域的な機能のほとんどが集約されており、市のまとまりを対象とする機能についても、大半が立地しています。敷地や交通上の制約から中心市街地には立地しづらい総合病院や高校、沿道型の商業なども国道1号沿線を中心とした都市的居住圏内に集積しており、主要な都市機能は沼津駅を中心とした3km圏内に集中しています。

一方、日常生活圏の機能についても中心市街地には外縁部と同様の配置があり、本市の中心市街地が高次都市機能を備えつつ日常生活にも便利な地区であるということが見てとれます。

一般的に都市機能は、図13のように広域性の高い機能ほど日常性が低く、必要な施設数も少なくなります。このため、都市機能の配置は広域性の高い機能が一定の範囲に集約された方が機能的であるといえます。

今後、本市が都市機能の再編集約を図り、コンパクトなまちづくりを進める上では、都市軸上へ効率的に機能を集約していく必要があります。そのためには、従来の南北軸に加えて、伊豆方面への広域交通を担う幹線道路であり、土地区画整理事業による基盤整備が進む国道414号沿道までを機能集約軸ととらえ、都市の骨格を強固にしていくことが求められます。

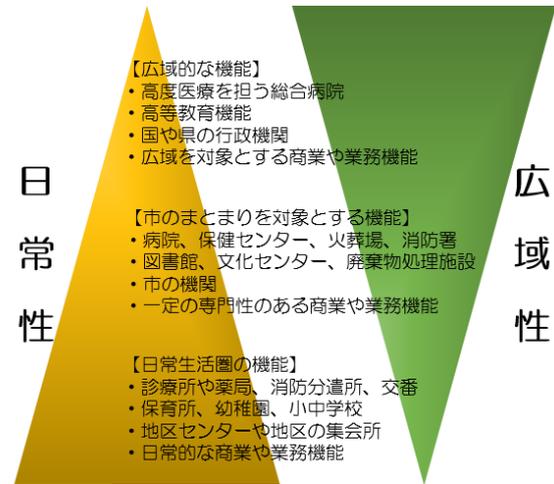


図13: 都市機能の配置イメージ

3) 土地利用

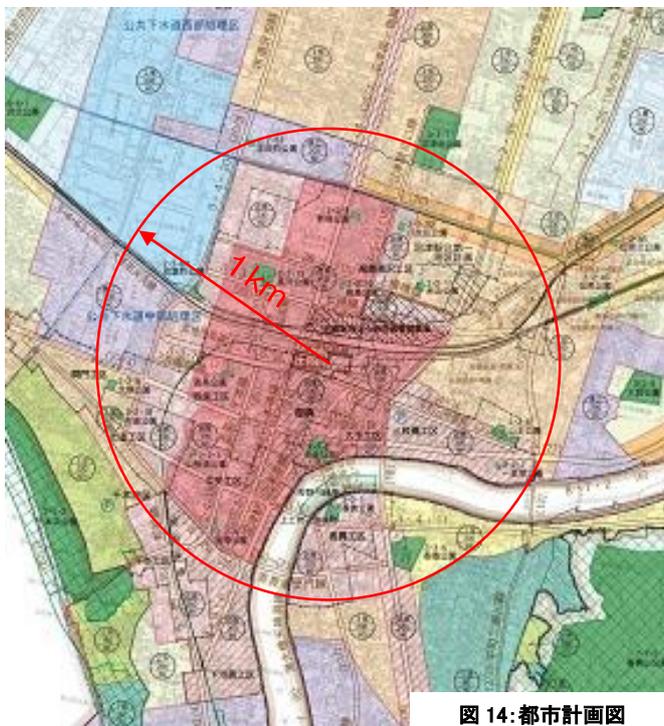


図14: 都市計画図

化や空き家化が進行しており、土地利用の面からも中心市街地の空洞化が懸念されます。

公園、広場、公開空地等については、大規模開発等によって整備されている箇所もあるものの、中心市街地全体としては小規模なものが中心で、数も多くはありません。

本市の中心市街地は、大半が商業地域・近隣商業地域に指定されており、東側の一部が住居系の用途地域となっています。

南北都市軸上には、沼津駅を中心に商業用途の建築物が多く、比較的高度な土地利用が見られますが、駅から離れるにつれ小規模な店舗併用住宅、専用住宅等が増加していき、同時に業務系と住宅系の用途が混在する地域が見られるようになります。

駅1km圏には総じて小規模な建築物が多いことも特徴であるといえます。細分化された土地が多いことから、マンション建設や新規産業誘致等のための新たな大規模用地の確保は難しい状況にあります。

また、近年では、建物の空き地・青空駐車場



低未利用地の状況(青空駐車場)

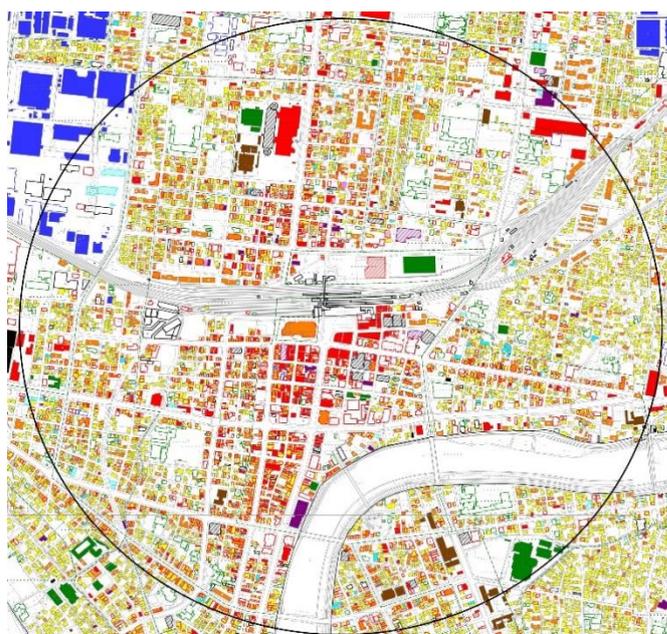


図 15:土地利用の状況
(出典:H23 度都市計画基礎調査)

4) 交通基盤

自動車交通については、南北都市軸上に幹線道路が配され、その外縁に環状線が形成されています。しかし、中心市街地では鉄道によって南北市街地が分断されており、南北往来が可能なガード付近では慢性的な交通渋滞が生じています。このため、沼津駅周辺総合整備事業や都市計画道路の整備により交通環境の改善を図っています。

また近年、過度な自動車利用に頼る状態から公共交通や自転車を見直し、環境負荷の軽減等を図るモビリティマネジメントの考え方が注目されています。本市においても、地形が比較的平坦であることや多くの高校が立地することから、自転車は重要な交通手段の一つとなっています。沼津駅周辺では、自転車通行帯の設置や歩道の段差解消などによって、安全で快適な自転車通行環境の整備を進めています。



段差が解消された歩道

歩行環境については、中心市街地の主要道路には広い歩道が整備されていますが、駅南北の往来が不便であることや、横断しづらい道路があることなどの課題も見られます。

5) 公共交通

かつて国鉄の機関区が置かれ、鉄道交通の要衝であった沼津駅は、現在もJR東海道本線、御殿場線の2路線が乗り入れ、年間約770万人が乗降しています。

また、沼津駅はバス・タクシー発着の拠点にもなっており、公共交通のターミナル機能を果たしています。沼津駅を発着するバスは、3つのバス会社が100路線（平成24年）を運行しており、市内各所をはじめ、三島駅、富士駅等を結んでいます。

しかしながら、乗合バスの利用は減少傾向にあり、維持が困難となっている路線の存在や、沼津駅の南北を結ぶバスの運行路線が極めて少ないことなど、改善すべき課題が見られます。

また、東京方面への高速バスも発着します。

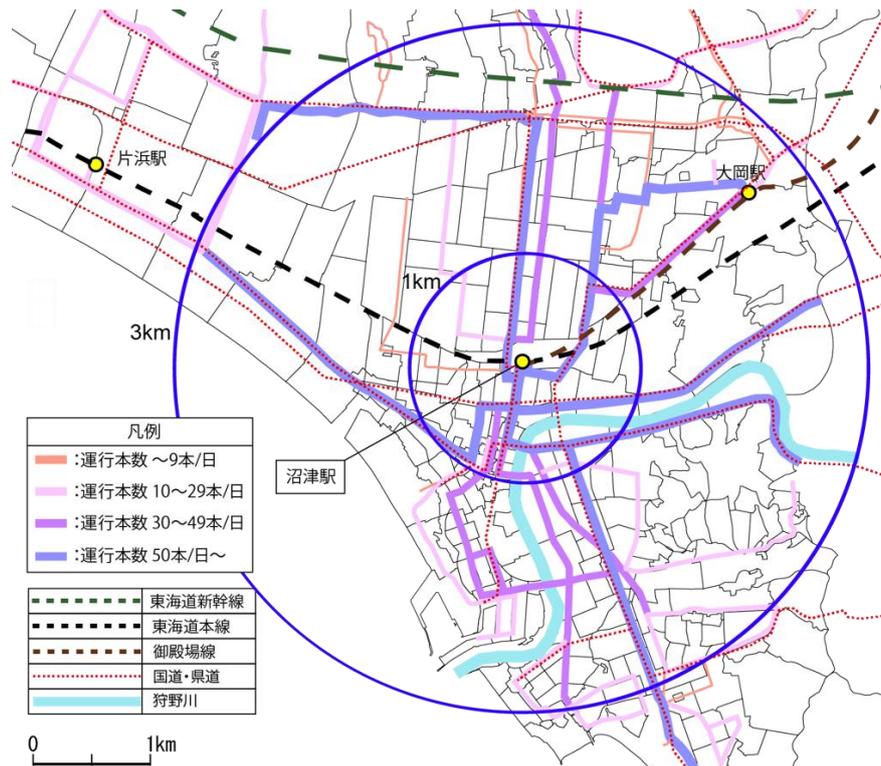


図 16: バス路線の状況

(4) 商業・業務等

1) 商業・サービス

本市の中心市街地は、かつては「商都沼津」と言われ、大型店と買回り品を中心とした商店街の商品構成が、広域からの買い物客を引きつけてきました。

しかし、郊外型大規模商業施設の出店や広域交通網の整備により、中心市街地の商業と郊外・沿道型の商業との棲み分けが始まり、中心市街地では大型店の撤退や空き店舗の増加が問題となっています。



商店街のにぎわい
(平成 12 年頃)

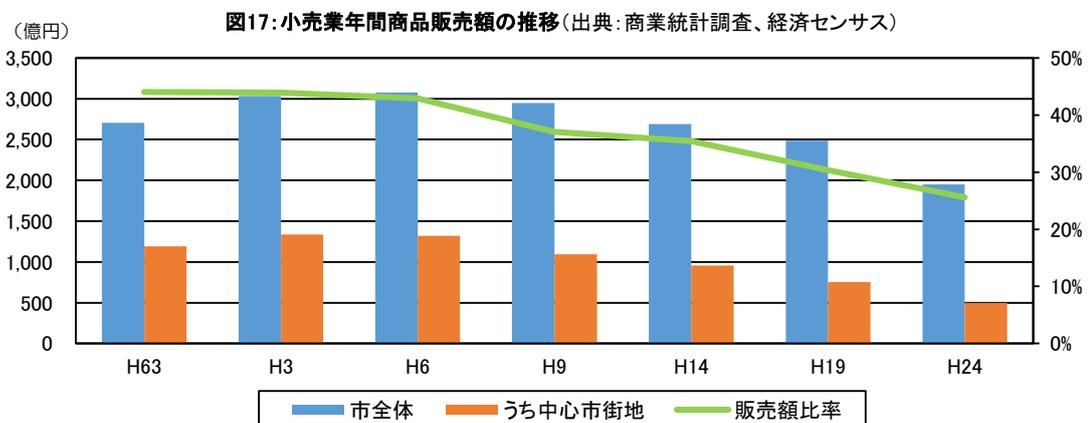


図18:近隣市町の小売業年間商品販売額の推移
(出典:商業統計調査、経済センサス)

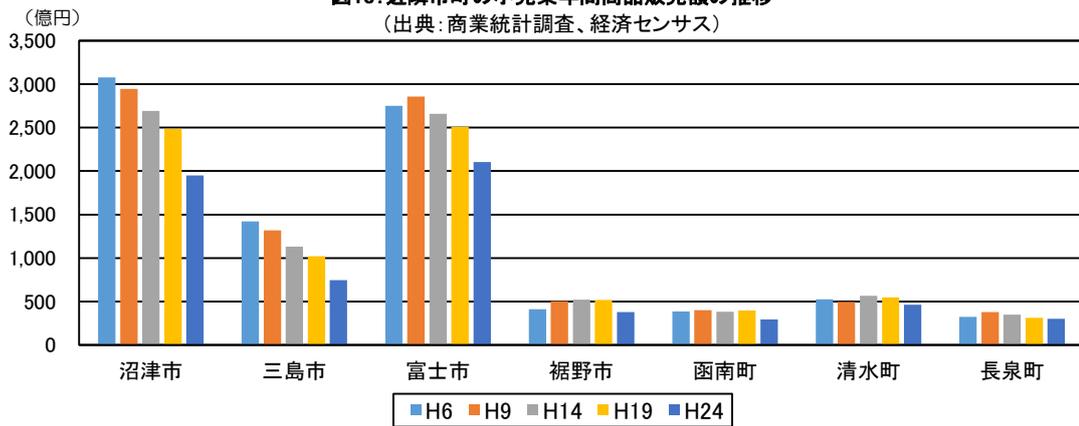
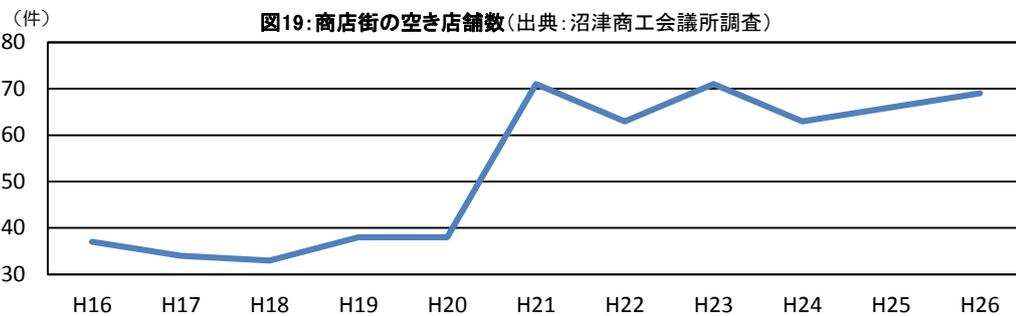


図19:商店街の空き店舗数(出典:沼津商工会議所調査)



しかしながら、中心市街地への来街者を対象としたアンケートでは、来街の目的が「買物」である人が最も多く、また、中心市街地のまちづくりに必要な要素としては「魅力的な商品を扱う店舗」との回答が最も多かったことから、来街者は現在でも「商都沼津」のイメージを抱き、商業の充実を期待していることがわかります。また、商店街が定期的で開催する「市」は毎回多くの買物客でにぎわっており、消費者は「買物の楽しさ」や「こだわりの商品」を求めているのではないかと推察されます。



アーケード名店街「朝イチ」

一方で、中心市街地の居住者で日用品を中心市街地内で求める人の割合は半分に満たず、日用品の買物の交通手段も自家用車が多いというアンケート結果もあり、中心市街地の商業が居住者の

日常的なニーズを満たしきれていない状況もうかがえます。

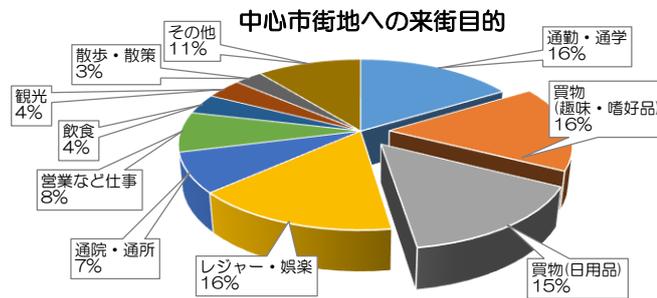
こうしたことから、今後の中心市街地の商業には、広域からの多様な人を呼び込む高付加価値品、地場産品などの高質で特色ある商品やサービスの提供と、まちに住む人、働く人のニーズを満たす日常的な商品とサービスの提供機能の強化とが求められると考えられます。

また、自家用車を中心市街地への来街手段とする人も多いことから、使いやすい駐車場など車利用者への配慮も求められます。

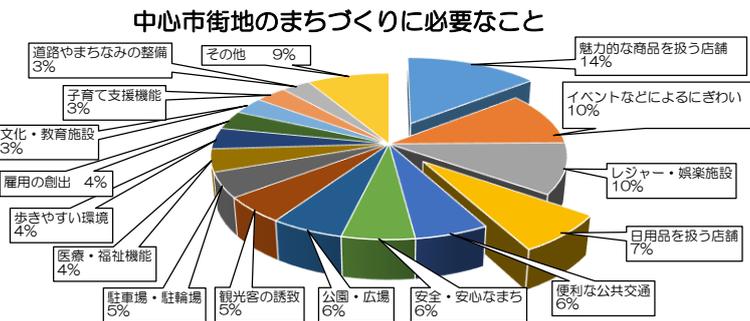
併せて、消費者ニーズの多様化に対応し、商業床の適正化や建物のリノベーション・更新によって生じた床に、医療、福祉、教育といった生活関連サービス機能を適切に誘導するなど、商業・サービス提供機能の再配置についても検討が必要です。

まちの声

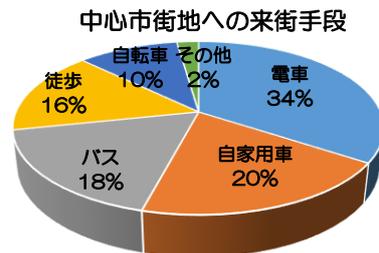
中心市街地来街者へのアンケート結果



本市の中心市街地への来街目的を「買物」とした人が3割を占めています。



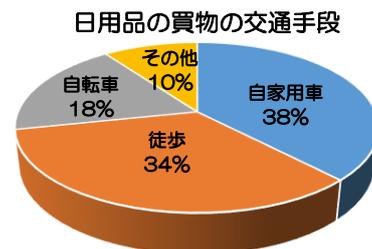
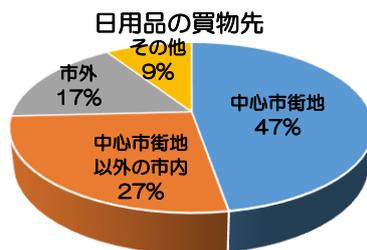
来街者の2割強が中心市街地のまちづくりに商業が重要であると答えています。



電車・バスなどの公共交通機関の利用が最も多いが、自家用車の利用も多いことがわかります。

中心市街地来街者アンケート (中心市街地整備企画室実施)

中心市街地住民へのアンケート結果



日用品の買物は徒歩圏内でする人が多い一方で、自家用車で域外に行く人も多く、車が生活に密着していることがうかがえます。

中心市街地住民アンケート (中心市街地整備企画室実施)

中心市街地の商業の求心力低下が叫ばれて久しいですが、現在でも本市の中心市街地には 12 の商店街組織が存在し、それぞれの個性に応じた顧客層をつかんでいます。また、商店街には、老舗と呼ばれる個店や高い技術や専門性を持った個店が多くあり、近年では、若い店主が感性とこだわりを活かして経営している個店も支持を集めています。

魅力ある個店の集積こそが魅力ある商店街をつくるという本分に立ち返り、意欲ある個店を増やし、支援する方策が求められます。併せて、エリアマネジメントの考え方を取り入れ、商店街の店舗を戦略的に配置構成することも必要です。



商店街の老舗

また、中心市街地の商業環境の特徴として、売場面積が小さい店舗が多いことがあり、これは、これから商売を始める人にとっては起業しやすい状況であるといえます。こうした特徴を活かし、近年注目されつつあるボディメンテナンスやペットケアなどの新しい商業・サービスの誘導や起業・創業の支援などによって、中心市街地ならではの商業環境の形成を図る必要があります。

2) 業務等

本市の中心市街地には、商業と並び業務系の機能も集中しています。市役所をはじめ国・県の出先機関などの官公庁、企業の支社・支店が多く立地し、平成18年の事業所統計調査では、事業所数・従業者数とも市全体の約3割を占めています。

また、従業者の密度を見ても、中心市街地と大規模事業所の所在地に集中していることがわかります。

しかしながら、情報化の進展や企業活動の合理化等を背景に、事業所は減少傾向にあり、空きオフィスが増加しています。こうした状況を機会と捉え、空きオフィスを活用した起業の支

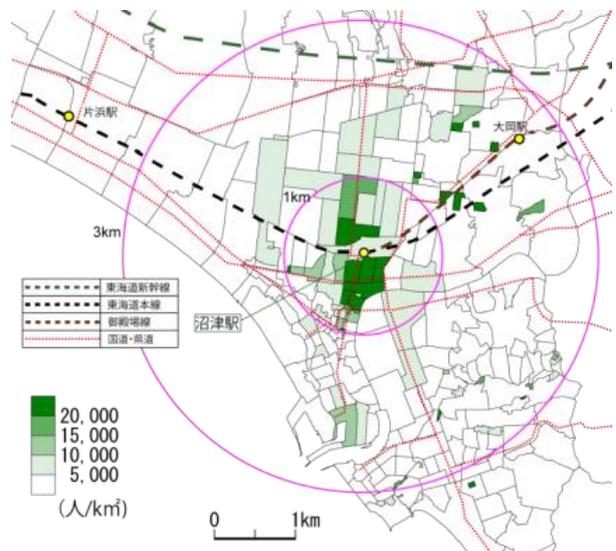


図 20: 町丁目別従業者数密度
(出典:H18 事業所統計調査)



シェアオフィス(イメージ)

援や、クリエイターによる空きビルのリノベーション、シェアオフィスやコワーキングといった新しい働き方の提案などを通じて、新たな価値を創造していくことが求められます。

また、空き店舗・空きオフィスの活用には権利者の理解が不可欠であることから、地権者、建物所有者のまちづくりの参画を促す取り組みが必要です。

(5) 居住・生活環境

本市の中心市街地は、多様な都市機能や生活関連サービスの提供機能が集積し、交通の利便性が高い一方で、海・山・川等の自然環境に近接しており、都市的サービスを受けながら自然にも触れ合える、恵まれた居住環境を備えています。

これからの中心市街地には、子どもから高齢者まですべての人が快適な都会と快適な田舎の良さを享受し、安心して心豊かに生活できるまちなか居住の場であることが求められます。

居住の受け皿である世帯と住宅の状況を見てみると、中心市街地は単



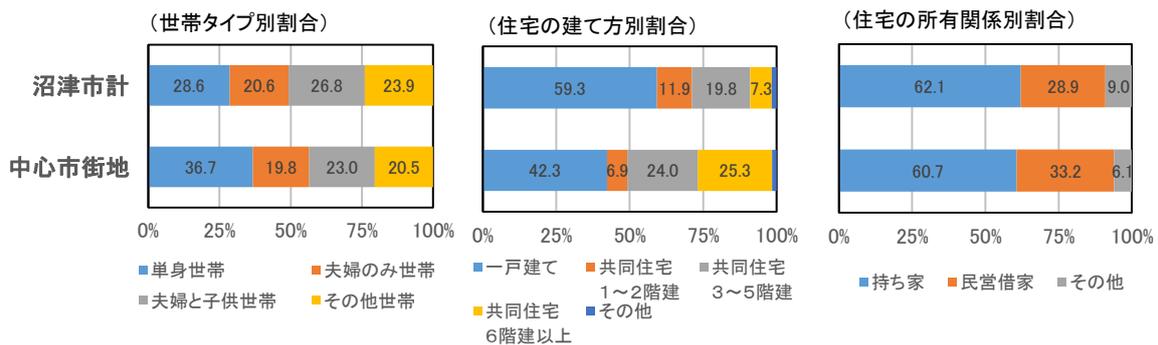
分譲マンション(高沢町)

身世帯の割合が高く、集合住宅が多いことがわかります。集合住宅は、分譲マンションと単身者向けの賃貸住宅に二極化する傾向が見られ、分譲マンションは中心市街地の幹線道路沿いに多く供給されており、同エリアには居住環境の良さ等からの一定のマンション需要があると考えられます。

しかし、市内他地域に比べて地価が高く、マンション建設に適した規模の土地の流通が少ないことなど、需要に応えることが困難な状況も見受けられ、中心市街地での居住を選択しやすくする方策が求められます。

同時に、良好な住環境とまちなみの形成のため、都市軸上には低層階に商業・サービス・業務等、高層階に住居を配した都市型住宅、外縁部には低層～中層の戸建及び集合住宅の立地を誘導するなど、住宅の立地の適正化を図ることも必要です。

図 21: 世帯・住宅の現況(出典: H22 国勢調査)



また、多くの市民の生活において日常的に車が利用されている一方、沼津駅至近においては地価や敷地の面で駐車場の確保が困難な状況があるため、住宅供給とカーシェアリングなど自動車利用サービスとの連携も考えられます。

あらゆる世代が様々なライフスタイルに応じて、自分らしく暮らせる・暮らし続けられるよう、居住環境・生活支援機能・安全安心な環境等の充実が望まれます。また、人口減少・少子高齢化への対応等を踏まえ、各世代の中でも特に子育て世代や高齢者の生活に対するサービスの向上を図る必要があります。



毎年5月に開催される城岡神社例大祭(大手町)

宿場町、城下町としての歴史を持つ本市の中心市街地には、いわゆる「近所づきあい」があり、都市部にありがちな人間関係の希薄さはあまり感じられません。自治会などの

コミュニティが維持されており、地域住民が日常的に支えあったり、神社の例大祭などを盛大に行ったりしています。こうした地域コミュニティに転入者などが溶け込みやすい開放的な関係の構築も求められます。

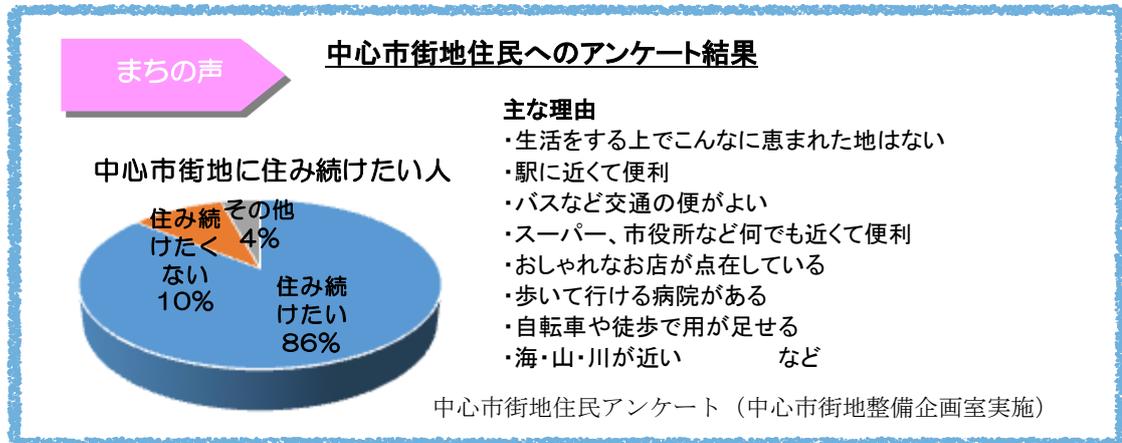
また、立地や交通の利便性や買物環境などから、実際に中心市街地に住んでいる人の多くが住み続けたいと考えています。本市の中心市街地で暮らすことの良さを顕在化し、域外の居住者に「沼津のまちなかに住みたい」と思われるような情報発信も必要です。

特に、新幹線を利用すれば1時間強で東京まで行



イメージ戦略ツール(ポスター)

ける交通アクセスの良さ、富士山を望み、狩野川、沼津アルプス、千本松原、駿河湾などの自然に近接しながら都市的サービスを楽しむことができる環境、美味しく安全な水や恵まれた山海の食材などは、首都圏からの移住を誘導するための絶好のアピールポイントとなります。戦略的なシティープロモーションにより、居住の場としての本市の魅力をもっとPRする取り組みを進めます。



(6) 福祉・教育等

1) 医療・保健

住む人、働く人が集中し、交通利便性も高い本市の中心市街地には、図22のとおり他地域に比べて多くの病院・医院が集積しています。重篤な症状や入院加療が必要な場合以外の日常的な身体の不調等には、地域のかかりつけ医が重要な役割を果たします。中心市街地の医院はほとんどの診療科を網羅しており、保健センターや健康福祉プラザサンウェルぬまづなど地域福祉と健康を支える機能とともに安心して暮らせる環境の一助となっています。

また、健康への意識の高まりとともに市民体育館や勤労者体育センターの利用や地区センター等で行われる



沼津ランニング&スキルズステーションでは、狩野川ハーフマラソン大会などのイベントも実施

健康・体づくりの講座などの利用も増加しています。

近年では、整備された狩野川左岸（狩野川 View Line）でウォーキング、ジョギングを楽しむ人も増えており、中央公園にはこうしたニーズに応えるため「沼津ランニング&スキルズステーション」が開設されました。現在、狩野川にほど近い香陵運動場（香陵公園）に新市民体育館の建設が計画されており、狩野川や沼津アルプスと一体となった健康づくりの拠点となることが期待されます。

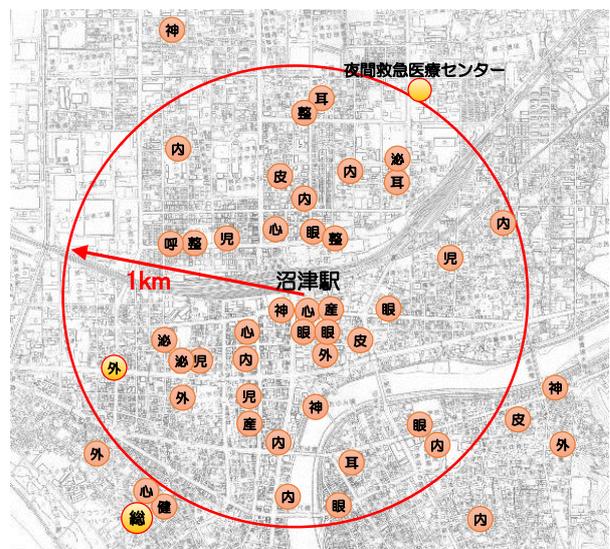


図 22: 中心市街地の医院等立地状況(歯科を除く)

2) 子育て・教育

本市における15歳未満の年少人口の割合は周辺市町と比較して低く、中心市街地においては、市全体と比べさらに低い状況です。

	静岡県	沼津市		三島市	富士市	裾野市	伊豆の 国市	清水町	長泉町
		全体	中心 市街地						
15歳未満	13.7%	12.8%	11.1%	13.5%	14.7%	15.2%	13.0%	15.8%	16.6%
15～64歳	62.5%	62.5%	63.5%	63.7%	63.5%	65.7%	61.1%	63.5%	64.6%
65歳以上	23.8%	24.6%	25.4%	22.8%	21.8%	19.1%	25.9%	20.7%	18.9%

図 23:本市と周辺市町の年齢階層別人口割合(出典:H22 国勢調査)



図 24:人口に占める年少人口の割合
(出典:H22 国勢調査)

中心市街地で小・中学校の統廃合が見られますが、本市においては、小・中学校が維持され、教育・学習の機能が保たれるとともに子育てサポートキャラバンや地域コミュニティの拠点としても機能しています。

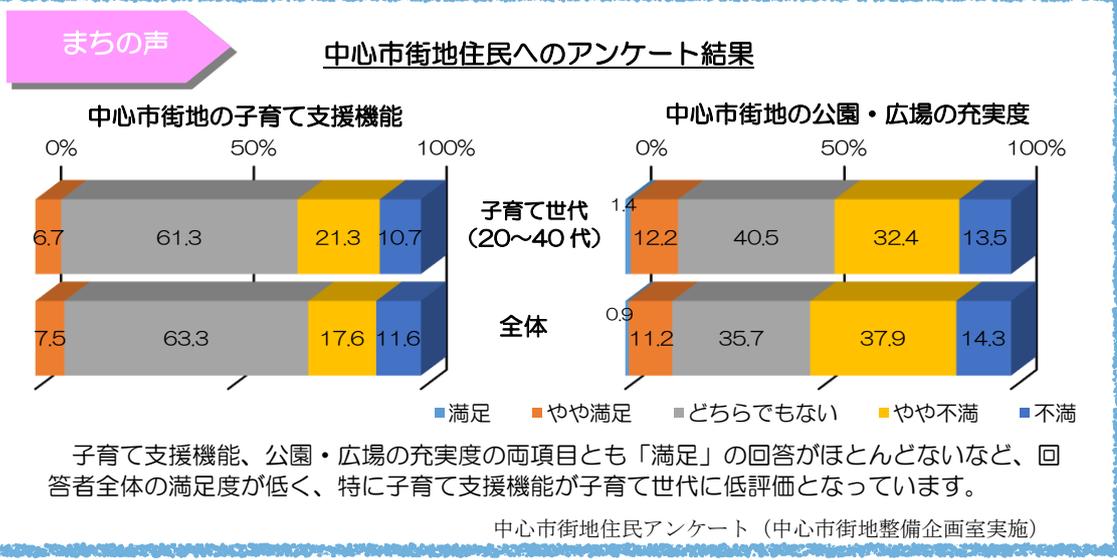
一方で、中心市街地における子育て支援機能や、子どもを安心して遊ばせられる公園・広場に対する子育て世代の満足度は低く、改善が求められます。

しかしながら、本市の中心市街地は、都市基盤が整備されて郊外にはない安全な歩行空間が確保されているなどハード面の優位性に加え、治安が良く、子育て支援施設や多くの小児科医が立地するなど、子育てしやすい環境が整っています。保健センターやサンウェルぬまづなど、妊娠時からのサポート体制が整っていることも強みです。

また近年、少子化の進行や中心市街地の空洞化に伴い全国的に中心市街地



駅前であり、一時預かり保育も可能な沼津っ子ふれあいセンター



また、本市において待機児童はおりませんが、女性の社会進出の進行や中心市街地の事業所・従業員の多さを考えると、中心市街地における保育施設の潜在的な需要は高いものと推察されます。学童保育の充実も同様であり、平成27年度から子ども・子育て支援新制度が施行予定であることから適切な対応が必要です。

少子化の進行、人口減少は教育、福祉分野だけでなく地域コミュニティや経済などにも影響を及ぼすことから、子育て家族層の居住誘導と流出の抑制を図る必要があります。本市の中心市街地が子育て世代の居住の場として選択されるためには、こうした施設の整備・誘導や、子どもにもやさしい都

市環境づくり、子育て支援策の充実やPRが求められます。

本市の特徴のひとつとして、多くの高校が立地し、教育理念やカリキュラムが高く評価されている学校が多いこともあげられます。こうした特徴を積極的にPRするとともに、中心市街地で高校生が交流したり学習したりできるような居場所づくりや、高校生のまちづくり活動への参画を促すことなどで彼らが「まち」を意識し、他都市へ進学しても将来帰ってきたいと思ってもらえるような取り組みも必要です。

3) 高齢者福祉

本市における65歳以上の高齢者人口の割合は周辺市町と比較して高く、中心市街地においては、市全体と比べさらに高い状況にあり、中心市街地は少子高齢化の傾向が顕著であるといえます。

生活に必要な機能がそろい、歩いて生活できる中心市街地の特性を活かし、医療・福祉機能の強化などによるすべての高齢者が元気で生き生きと暮らせる環境づくりが求められます。また、高齢者のみの世帯、高齢者の単身世帯が増える傾向にあることなどから、地域で高齢者を支える仕組みづくりも必要です。



通所施設に併設された多世代交流スペース(仲見世商店街)

一方、何らかの支援

が必要な高齢者にとって、地域包括ケアシステムの充実が求められます。近年では、中心市街地にも通所介護施設等の立地が見られるようになりましたが、高齢者が歩いて生活の用が足せ、安心して安全に暮らすことができる中心市街地では、今後、サービス付き高齢者向け住宅の需要が高まることも予想されます。

同時に、高齢者が心豊かに第二の人生を送れるよう、高齢者の就労や社会参加・交流のニーズに応える環境を整える必要があります。

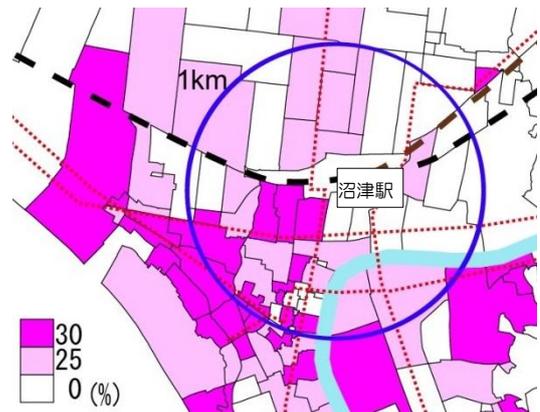


図 25: 人口に占める高齢者人口の割合 (出典:H22 国勢調査)

まちな声

中心市街地住民へのアンケート結果

中心市街地の医療・福祉機能

	0%	50%	100%
60代以上	10.6	33.6	25.7
全体	6.0	27.2	24.6

■ 満足
 ■ やや満足
 ■ どちらでもない
 ■ やや不満
 ■ 不満

事業者の声

- ・地域包括ケアのような育った場所で住み続けられる環境を整備することが求められるが、費用等の面で中心市街地に進出するのは難しい
- ・多世代交流施設が必要
- ・生鮮三品を充実し、歩いて買物ができる環境が必要

【介護・福祉事業者】

【商店街振興組合等】

事業者ヒアリング (中心市街地整備企画室実施)

中心市街地の医療・福祉機能については、回答者全体では「不満」「やや不満」が「満足」「やや満足」をわずかに上回っていますが、60代以上になると「満足」「やや満足」が不満を10%上回ります。

中心市街地住民アンケート (中心市街地整備企画室実施)

(7) 交流・にぎわい

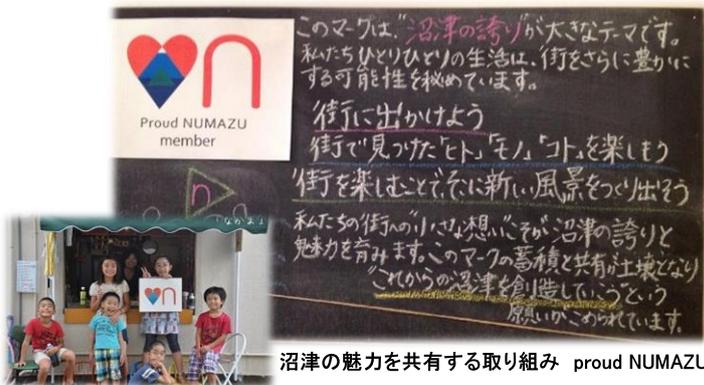
本市の中心市街地は、商業だけでなく交流・にぎわいの空間としても住む人、訪れる人を惹きつけてきました。

本市最大のイベントである沼津夏まつり・狩野川花火大会や、全国から踊り子が集まるよさこい東海道など、商店街や中央公園、狩野川等を舞台に、年間を通じて大小さまざまなイベントや催しが行われています。また、プラサ ヴェルデのオープンや狩野川の「都市・地域再生等利用区域」指定などによる新たな集客や交流が期待されるところで



よさこい東海道は、商業者が中心となって企画運営する

です。近年では、若年層を中心とした有志による、まちをポジティブに楽しむ新しい感覚のイベントなどが活発に行われるようになっており、こうした活動がまちなかのネットワークを生み、彼らが提案、発信する沼津のライフスタイルが共感を集め、新たな活動につながるといった好循環が生まれています。



沼津の魅力を共有する取り組み proud NUMAZU

こうした活動がまちに活力をもたらしていますが、イベント開催時と非開催時の歩行者通行量に大きな差があるなど、イベント等のにぎわいが日常に結びついておらず、日常的なにぎわいを創出する仕掛けが必要です。また、中心市街地に行けば一日楽しめるような時間消費型の機能の強化も求められます。

そのためには、市民や来街者の憩いやにぎわい、健康づくりの場として活発な活用がなされるようになっている中央公園・狩野川周辺のセントラルパーク構想のさらなる推進や、狩野川のような公共空間の民間活用を促進していく必要があります。

同時に、狩野川View Line や蛇松緑道など日常的に散策を楽しめるルートの充実を図り、歩いて楽しい、回遊したくなるまちづくりを進めることも必要です。

また、日本の近代教育発祥の地であり多くの文人墨客を育んだ歴史や文化、狩野川の水辺環境をはじめとする恵まれた自然、山海の恵みを活かした沼津ならではの食、商店街の魅力ある個店、まちに根付いたバー文化などの地域資源を顕在化する取り組みも重要となります。こうした地域資源を適切に発信することで、本市のイメージアップ、着地型観光などの交流の促進、市民の沼津に住む喜びと誇りの醸成等が期待されます。



「沼津自慢フェスタ」市内の若手有志が企画した、沼津自慢の食、酒、人を一堂に集めたビアガーデンや特設バーカウンター、野外レストラン、音楽ステージ等からなるイベント。食をはじめとする沼津の地域資源や、バー文化の顕在化に貢献。

現在も、沼津駅を起点に多くの観光客が沼津港・沼津御用邸記念公園等の観光スポットや沼津アルプス・千本松原などの景勝地を訪れていますが、こうした目的地相互の連携や、公共交通等による目的地と中心市街地との連携を強化し、中心市街地に観光客を滞留させ、にぎわいの波及効果呼び込む仕掛けも必要です。

(8) 市民活動

中心市街地では、NPO、自治会などの団体やボランティア等による様々な市民活動が展開されています。前述の若者を中心としたイベントをはじめ、まちの美化・緑化、生涯学習、子育てサークル、ワークショップなどその活動は多彩です。

こうした市民の主体的な活動を支援し、交流を促進するため、活動の拠点となる場づくりや情報交換の機会づくりが求められます。

まちに関わる行動を起こすことは、自身のまちでの生活を豊かにし、まちを好きになったり誇りに思ったりすることにつながります。誰もが行動を起こしやすい環境を整えるとともに、こうした行動に対して理解を示し、支える意識を醸成することも必要です。



プロレスを通じて沼津のPRや社会貢献を行う「沼津プロレス」

全 76 団体		
主な活動内容	保健、医療または福祉の増進を図る活動	48 団体
	社会教育の推進を図る活動	51 団体
	まちづくりの推進を図る活動	43 団体
	観光の振興を図る活動	1 団体
	学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動	39 団体
	地域安全活動	8 団体
	男女共同参画社会の形成の促進を図る活動	5 団体
	子どもの健全育成を図る活動	54 団体

図 26: 沼津市所管のNPO法人 (平成 26 年 11 月末現在) (活動内容の重複あり)

(9) 防災

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災による地震・津波被害は、南海トラフ巨大地震が想定される沼津市民にも大きな影響を与えました。

静岡県第 4 次地震被害想定においては、中心市街地の一部地域まで津波による浸水が想定されており、また、中心市街地には耐震性に劣る建築物が多く存在しています。

こうした状況の中、戦後まもなくアーケード街が建設された町方町・通横町地区で地元主体の再開発事業が計画されたり、商店街が老朽アーケードの改修や撤去に取り組んだり、安全安心なまちづくりに対する意識が高まっており、官民一体となった対策の推進が望まれます。

観光スポットである沼津港をはじめとした背

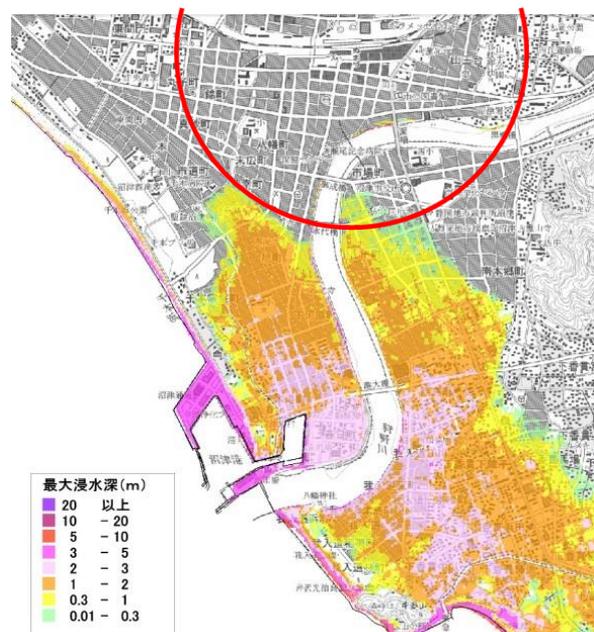


図 27: 静岡県第4次地震被害想定 レベル2※津波浸水深

後地では大きな津波被害が想定されていることから、中心市街地が災害時の避難者の受け入れ先として機能するために、こうした地域との日常的な結び付きを強化する必要があります。

また、中心市街地のほとんどが防火地域または準防火地域に指定されていますが、指定前に建築され、基準を満たしていない建築物も存在しており、対策が求められます。

※静岡県第4次地震被害想定レベル2

- 発生頻度は極めて低いが、発生すれば甚大な被害をもたらす、あらゆる可能性を考慮した最大クラスの地震・津波（千年～数千年に一度、まれに発生する可能性がある巨大地震・津波）
- コンクリート製の海岸堤防や河川堤防は地震動により破壊されるという仮定をしています。
- 土で築造された海岸堤防や河川堤防は地震動により高さが元の高さの25%まで沈下し、津波が乗り越えたと同時に無くなるという仮定をしています。

※上記の仮定条件は、今後の防災・減災対策を検討する上で最悪の事態を想定しておく必要があるために設定したものであり、実際の地震において堤防が全て壊れるということではありません。

2-2 現況と課題のまとめ

これまでの整理から、本市の中心市街地には「広域の拠点」、「地域社会の中心」、「便利な居住の場」という役割があり、同時に、住む人・訪れる人の様々な活動の舞台であることがわかります。

<p>広域の拠点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・首都 100km 圏内、富士箱根伊豆を結ぶ位置にあります ・交通の要衝であり、公共交通のターミナルとなっています。 ・南北都市軸上を中心に、高次都市機能が集約して立地しています。 ・広域商圏の中心です。 ・総合コンベンション施設「ブラサ ヴェルデ」がオープンしました。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・周辺のにぎわい拠点との連携が足りません。 ・公共交通の利便性が十分ではありません。 ・大型店が撤退し、商機能の低下が見られます。 ・市街地が南北に分断され、一体的な開発が阻害されています。 ・沼津駅付近で頻繁に交通渋滞が見られます。
<p>地域社会の中心</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・高い昼夜間人口比率を有しています。 ・事業所、就業者が集積しています。 ・多くの高校や専門学校が立地しています。 ・個性ある 12 の商店街と大規模 SC があります。 ・魅力ある個店が増加しています。 ・四季を通じて多彩なイベントが開催されます。 ・中央公園・狩野川界隈の利活用が進んでいます。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・空き店舗・空きオフィスが増加しています。 ・細分化された敷地、小規模な建築物が多いです。 ・老朽建築物や低未利用地が増加しています。 ・商品販売額が減少しています。 ・イベント等のにぎわいが日常に結びついていません。
<p>便利な居住の場</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・県東部随一の都市生活エリアです。 ・狩野川をはじめとした自然に恵まれています。 ・多くの集合住宅が供給されています。 ・医療・福祉機能が充実しています。 ・小中学校が維持されています。 ・子育て世代や高齢者も住みやすい環境が整っています。 ・防災への意識が高まっています。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・業務系・住居系の土地利用が混在する地域があります。 ・少子高齢化が進んでいます。 ・日常生活を支える商業・サービス機能が不足しています。 ・公園などのオープンスペースや緑が不足しています。 ・便利で快適な生活環境であることの認知が不足しています。
<p>市民活動の舞台</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自治会など地縁によるコミュニティが維持されています。 ・若年層を中心にまちを積極的に楽しむ活動が広がっています。 ・まちの楽しみ方、沼津のライフスタイルなどの提案、発信が共感を集めています。